

ネズコのさし木について

葎原営林署葎原種苗事業所 征矢野 正 典
 鈴木 芳 雄

1. はじめに

ネズコ材は心材が黒味をおびて渋味のある色と軽くて軟いという特性をもっていて、当署管内における木工場でもこの特性を生かし、画枠(額縁)を中心に民芸品、下駄などに多く利用されている。

こゝに当署管内におけるネズコの生産と木工場での消費をみると第1図のように、生産は漸減しており、消費はネズコ材と類似材の米杉を合せたものをみると48年度までは上昇傾向にあった。

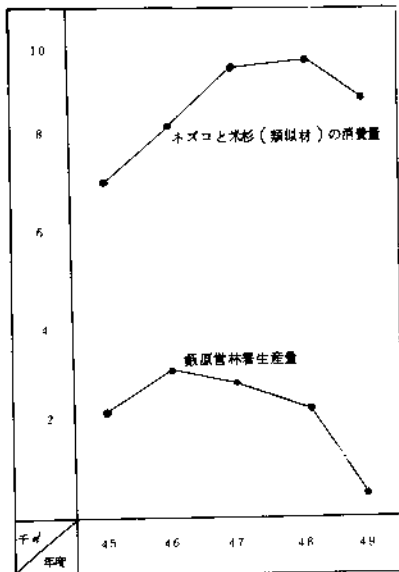
このような状況から地元木工業界では、当署に対し将来的展望に立ってネズコの造林地をつくるよう要望している。そこで当署でもこれに応じて「ネズコの造林地をつくってみよう」ということになり、その第一歩としてネズコの苗木をつくることにした。しかし種子がないためさし木によって苗木をつくることにし、昭和49年度にさし木を実行したところ比較的よい発根があったのでその方法と結果をこゝに発表する。

2. 作業経過と方法

(1) 採 穂

時 期 昭和49年5月23日(時期的に遅いがまだ発芽開始はしていなかった。)
 場 所 長野県南安曇郡奈川村奈川担当区部内400は林小班(境峠)
 林 況 標高1,400m, 木曾ヒノキ, サハラ, ウラジロモミを主とした林令230年生の天然林で屋根筋にネズコの天然木が点在している。

第1図 ネズコの生産と消費 (葎原署管内)

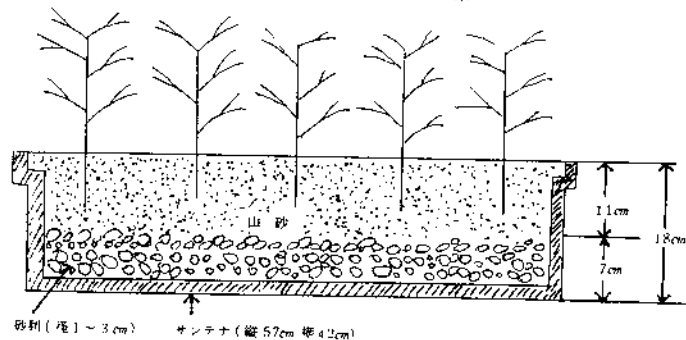


母 樹 胸高直径4~6cm, 樹高2~3m, 推定樹齢50年生前後
 荒 穂 樹冠の下部~中央部で上向きの心立ちのよい枝を、母樹1本から5~10本採穂、大きさは切口の傷みを考えて30cm前後とし3~4年生枝とした。
 運 搬 荒穂20本を1把にして束ね、バケツに水を入れ、切口を浸水して運搬
 水仮植 沢水に穂の長さの $\frac{1}{3}$ を浸水、よしで日よけ

(2) 床づくり

縦57cm横42cm深さ18cmの側面と底面が篩目状になったサンテナに第2図のように、排水と通気をよくするため径1~3cmの砂利を約7cmの厚さに敷き、その上に花崗岩の風化した土砂を入れてさし床とした。山砂は採穂地近くのものを使用。

第2図 さし床



(3) 穂づくり

5月27日水仮植地から水の入ったバケツに切口を浸水してさし床近くに運び、第3図のように穂の大きさは穂先から20cm前後のもので、3年生の枝より若いところの節のすぐ下を切口にして、剪定鋏で節を残して約45度の角度に斜めに切り、さしつけ部分の枝葉はつけ根から手でむしり取った。

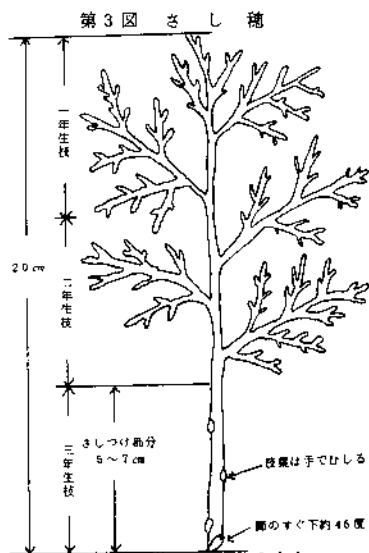
(4) さしつけ

さしつけの密度は一つのサンテナに8x7cmの苗間で40本さしつけ、案内棒で穴をあけて、さし穂の切口から約1cmを水でぬらしβインドール醋酸(IBA)5%と、βインドール醋酸(IBA)1%の粉剤をそれぞれにまぶして深さ5~7cmにさしつけた。

(さしつけた時の地温は14℃であった。)

(5) 日よけ

さし床の水分維持とさし穂からの蒸散抑制のために日よけをし、散水や観察を容易にする



ため高さ1.5mのところによしずを張り、周囲にも防風のためよしずを張った。写真No1参照

(6) 散水

さしつけてから9月中旬までは降雨日以外は夕方一度散水し、それ以降はさし床の状態をみて時々散水した。

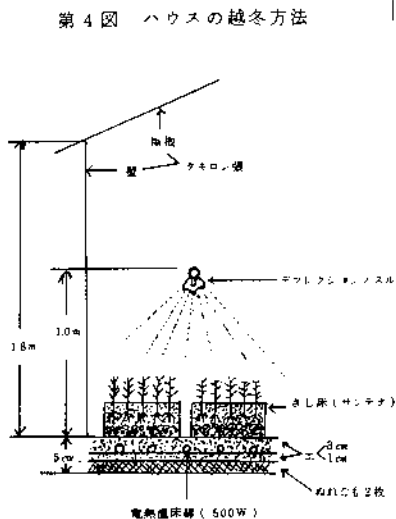
(7) 発根と越冬

さしつけ後2カ月経過した7月下旬(当時の地温は19℃)にさし穂1本から1~2本、長さ5mm程度の根が出、その根は3カ月経過した8月下旬(当時の地温20℃)には長さ1~3cm程度に伸びた。

当初9月上旬頃には床替して越冬する予定でいたが根の発育が悪いため、さし床のままに越冬することにした。しかし当地は標高970mで厳寒期には最低気温は-20℃、地温は-5℃にもなる寒冷地であるのでいろいろ検討の結果、ハウスにより越冬することにし、10月21日(当時の地温11℃)に第4図のようにハウス内の地下に電熱温床線を配線してサ



写真No1 さし床の日よけ状況



第4図 ハウスの越冬方法

テナをその上に配置して、地上1mの高さにデフレクションノズルをとりつけ、タイマー調節で散水して越冬した。

3. 掘取と発根調査

前述のようにして1年経過した50年4月30日床替するために掘取した。根を傷めないように水で床砂を流すようにして一本一本丁寧に掘取り、発根本数を調査したところ第1表のような発根率で85.2%であった。発根状態は写真No2、No3のとおりでI.B.A5%粉剤の方がI.B.A1%粉剤より発根本数が多かった。

4. 床替後の管理と育苗

床替は50年4月30日、カラマン2年生の床替床(N29.6g, P33.1g, K11.4g施肥)と同じように施肥床づくりをして、列間15cm、苗間20cmの6列植の33本/m²の密度でさし床にあった時と同じ深さにして植つけた。(写真No4参照)。植つけ後無日覆でおいだが苗木の色が黄色味をしているので6月16日に寒冷紗(ダイオシート)を高さ60cmに張り日よけをしたが、7月22日どうも黄葉が回復しないので日よけの

第1表 掘取時発根状況 (50.4.30調)

薬剤別	さしつけ数	発根数	発根率	根の状態
I.B.A(βインドール酪酸)5%粉剤	320本	273本	85.3%	根数多い
I.B.A(βインドール酪酸)1%粉剤	560	477	85.2%	根数多い
計(平均)	880	750	85.2%	



写真No2 発根状況



写真No3 発根状況

高さを40cmに下げ寒冷紗の上に更によしずを1枚重ねてかけた。その後通風をよくして健苗とするため8月19日また日よけを高さ60cmに上げ、10月4日日よけをはずして、得苗率と苗長生長を調査した結果第5図のとおりであり、さしつけた年には全々施肥をしなかったが平均3.5~3.9cmも伸びていた。

12月6日床替床の越冬を第6図のように床を板で囲い凍上り予防のため粗がらを7~10cmに敷き、囲い板の上によしずを2枚重ねて防寒し越冬中である。

5. まとめ

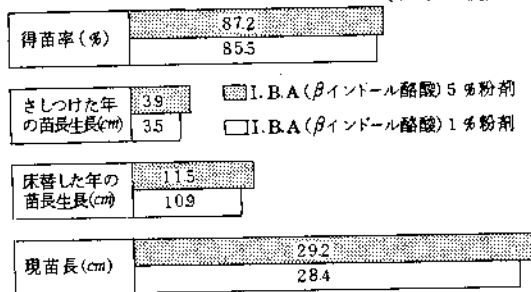
以上さし木の実行方法と結果を述べたが、採種からさしつけ、越冬、床替まで自分達で実際にやってみて

- (1) 寒冷地でもさし木が可能であること、
- (2) 木曾五木の一つであるネズコのさし木が成功したこと、

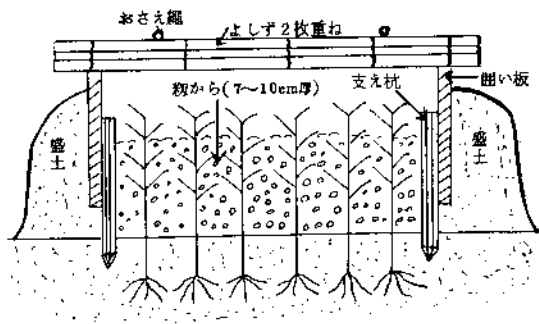


写真 4 床替状況

第5図 床替後の得苗と苗長生長 (50.10.4調)



第6図 床替床の越冬方法



- (3) 適切な管理をすれば、さしてから2年で山行になる可能性があること、などにより自信を深めることができた。

この苗木が立派なネズコの造林地として大きく成長することを期待するとともに、この体験をもとにして今後更にネズコのさし木が事業的にできるような体制をつくらなくてはならないと思っているのでよろしく御指導の程をお願いする。

終りにこの仕事をおこなうにあたり、御指導と御助言を賜った、林業試験場木曾分場百瀬造林研究室長はじめ多くの方々に深い感謝の意を表する。

王滝事業区におけるヒノキ人工林の成長量調査について

王滝営林署濁川担当区事務所	榎	省	三
" 南滝越担当区事務所	土	屋	正
" 北滝越担当区事務所	三	上	均
" 助六担当区事務所	安	藤	勝
" 水ヶ瀬担当区事務所	飯	島	隆
" 上島担当区事務所	藤	井	四

1. はじめに

王滝事業区は、木曾谷地域施策計画区の西端に位置し、特に寒冷多雨な気象条件であり、一年間の降雨量が3,000mm、平均気温が8℃となっている。

このような条件下にある当事業区の、幼令ヒノキ人工林の成長の印象はかなり悪く、果して将来の収穫量が、現行予想のとおり確保できるかどうか危惧の念を抱いてきた。

そこで、この疑問を具体的に解明するため事業区内の高齢ヒノキ人工林を対象に過去の成長過程を調査したわけであるが、その結果は、資料不足ながらも以下述べるように、私達の予想と異なるものであることが判明した。

2. プロットの設定及び概要

当事業区内の、瀬戸川、濁川、水ヶ瀬、北滝越の各地区の高令ヒノキ人工林を対象に12か所のプロットを設定した。